

養護教諭が行う知的障害のある生徒の性に関する指導の工夫 —保護者との協働を目指した研修会の実践と今後のあり方について—

鶴岡尚子 藤田絵理子*¹ 北岡大輔 中筋千晶 三木理恵子 林 修*²

*¹ 附属三校教育相談コーディネーター *² 和歌山大学教育学部

1. はじめに

本校では、平成 27 年度から高等部の知的障害が軽度である生徒への性に関する学習の取り組みを始めた。なぜなら、卒業を目前に控えた生徒たちに対して、今抱えている課題に対応する力をつけるだけでなく、卒業後の生活場面での性の安全も保障できるような教育が必要と考えたからである。これは、担任教師たちにも共通した願いである。

これまで、集団での指導と個別指導を組み合わせることで効果的な学習プログラムとなるのではないかと仮説を立て、試行錯誤しながら実践を重ねてきた。具体的には、一人一人の特性に応じた指導を行うための個別指導用の教材冊子「パスポート¹⁾」の作成とその活用である。平成 27 年度にはこの冊子を作成し、試行的に取り組んできた。さらに、生徒への事前・事後アンケートから、この「パスポート」を用いた指導には一定の効果のあることを確認している。今年度は、これまで取り組んできた「パスポート」を用いた個人への関わりによって得られた成果を活かしつつ、そのさらなる有効的な活用方法の一つとして保護者研修会を開催したので、その成果を報告する。

2. 性に関する指導における保護者との協働、連携について

ユネスコ「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」において、学校は多様な背景を持つ子どもたちが、性的な成熟を迎える時期を過ごす場所であり、包括的性教育の重要な場として位置づけられている。また、性と生殖に関する健康、薬物乱用、ジェンダーに基づく暴力や家庭内危機等への支援等、他の資源との必要な連携を提供する、信頼されたコミュニティセンターとなる可能性についても述べられている。田代・渡辺（2019）は、「学校が信頼されたコミュニティセンターとなることは、学校の教職員だけの力ではできません。学校の管理職や教育委員会などからのトップダウンでもできません。子どもたちの日常をつぶさに見ている教職員を中心に、保護者、そして専門的な立場から子どもたちの性を見ている地域の保健師や医師、看護師、教育方法など学問的見識をもつ研究者、性をめぐる人権課題の当事者団体や支援団体、そしてこれらのネットワークの形成を支える教育委員会や文部科学省などの教育行政機関といった幅広い層での「協働」が求められる」と述べており、学校が包括的性教育の実現を目指す中で「協働」の要となるとしている。さらに、保護者との協働については、「日常的な子どもたちの発言や振る舞いから、必要な学習課題が見いだせたとき、それを学校と共有することができれば、まさに子どもの成長・発達にそくし、社会的環境を踏まえた包括的性教育をつくり出すことができるはず」であるとして、学校教育においては、教師と保護者との協働が重要で不可欠なものとしている。

本校では、高等部普通科総合産業コース 1 年生の保護者に対して、生徒の家庭での様子や、保護者の性教育に対する考え方等を把握したりするためのアンケート調査を行っている。その結果をみると、多くの保護者は学校での性教育の実施を望んでおり、正しい性の知識や、自分も相手も傷つけない付き合い方を学んでほしいと考えていることがわかった。また、性教育の必要性は感じながらも、親としてどのように話せばよいのか分からないといった悩みを抱える保護者も少なくない。そのような場合、保護者へ

の助言を行ったり、絵本や書籍を紹介したり、外部の専門家と繋げたり、同じ様な悩みを持つ保護者と引き合わせたりするなどしてきた。こうした関わりは、学校が「信頼されたコミュニティセンター」になるための協働の実現に向けた一歩であると考えている。

また、広瀬（2019）は、子どもたちと地域、それぞれの実情に応じて性教育の内容は工夫するべきであると述べると同時に、その性教育の内容を保護者と共有し、支持してもらうことが重要であると述べている。このことは、各学校において性教育を保護者の支持が得られるような内容に編成する必要があるということを意味している。そして、在籍する児童生徒の実態や、学校にどれだけの性教育実践が蓄積されているか否かによって保護者と共有できる内容は異なる。そこで、保護者研修会においては、これまでの本校での集団指導や個別指導から得られた成果、また、外部の専門家の話等を織り交ぜ、まずは本校の児童生徒の現実を保護者に伝えたいと考えた。そこから保護者の思いや、今悩んでいることなどを引き出し、本校の性教育実践に活かしたり、今後の協働の在り方についての示唆を得たりすることにしたと考えた。

3. 保護者研修会の実践報告

本校では、学校保健・衛生管理委員会が主催の保護者研修会を年1回実施しており、テーマはその時のニーズに応じたものになるよう委員会の中で決定し、外部講師を招いて開催してきた。この機会を利用し、今年度は養護教諭が講師を務めることとした。当日の参加者は小学部から高等部までの保護者17名であった。実施に当たっては、事前に保護者から悩みや相談したい事柄を収集した。収集された内容は次のようなものであった。

○高校生になり、男女交際をしている生徒もいるが、お互いの距離感（公の場での行動）をどう伝えたらよいか

○我が子が異性への関心や感情で困ることがないか。それをおさえる理性も一緒に成長するときには本人が理解できるのか

○どちらかというと、（保護者が）知らんぷり、触れないようにしているのだが、やはり話をしないといけないことだと思っている。どのように本人と話をすべきなのか。

これらの質問から、保護者は性教育の必要性を感じつつも、どう伝えたらよいのか分からない戸惑いや、我が子が性に興味を持ち始めた時のことを心配する様子が読み取れた。これらの質問に対しては、児童生徒の性への興味、理解の程度は個々に異なることを大前提にしつつ、これまでの保健室での対応事例や外部の専門家の話に触れながら話した。

講話の内容としては、大まかにではあるが、次の4点を中心にした。

○犯罪被害予防の視点から、なぜ性教育が必要か。

○世界の性教育と日本の性教育の現状

○本校の児童生徒の性に関する実態（性の情報源や間違っただ思い込み、質問の例）

○保健室での指導を通して見えてきたこと

保護者の立場からすれば、性に関することは、小学部の子どもにはまだ早いと思われがちであろう。それだけに、性の問題は思春期に限ったことではなく、犯罪被害予防の視点に立つと幼児期から男女共に性教育が必要であること強調して伝えた。すると、小学部の男子児童の保護者から「えっ？そんな早くから必要なん！」と驚きの声が上がった。このことから、低年齢期の児童の保護者にも性犯罪の実態を伝え

ることで、危機意識を高めるとともに教育の必要性を認識する効果が期待できると思われた。

また、研修会後には保護者同士で我が子の家庭での様子や困っていることについて会話している様子が見られた。保護者にとって、性に関する悩みは教師や他の保護者に相談することが難しいことも少なくない。これまでの関わりの中で、「誰に相談していいのか分からない。」、「(こんな性の課題があるのは)うちの子だけだと思って、誰にも言えなかった。」、そういった保護者の孤立感が課題解決を困難にしていた状況も見えてきた。こうした経験から、筆者には保護者間で我が子の性の相談が出来るようになり、話すことの抵抗感を低めることが重要であるという認識があった。したがって、今回の講話を通して、このように保護者間でのコミュニケーションが促進されたことは、今後、保護者が子どもの性に関する課題に直面した際に、他の保護者とのコミュニケーションによって不安が軽減したり、子どもの性的な興味を否定的に捉えず、前向きに対応策を考えたりすることに繋がって行くのではないかという期待感が膨らんだ。

また、保護者からは、「障害のある我が子にも、恋愛感情などは当たり前の感情で、性行為なども十分あり得ることなのだと思う。」、「先生たちにも危機意識をもって子どもたちを見てほしい。」、「障害のない年頃の兄妹のことが心配になった。」といった感想も聞かれた。

これらの感想から、今回の講話の中で、「パスポート」を活用した実践をとおして得た成果（知見）を保護者研修会において活用したことで、保護者にとって我が子の性に関する課題が現実味を帯びて感じられるようになったものと推察された。

4. まとめ

今回の研修会では、これまで個別に対応してきた性に関する課題への対応事例が、他の保護者の悩みと共通する部分も多いと考え、保健室からの実践発表のような形を用いた。

保護者が子どもの性の実態を把握し、より良い支援者となるためには、このような性に関する啓発の機会が重要であると考え。それは、公の場で語られることの少なかった性の話題や情報を学校から積極的に提供していくことで、保護者が学校を信頼できるコミュニティセンターとして認識できるようになったり、保護者自身も知識を得たりすることで、主体的な支援者となったりすることが期待できるからである。研修会の持ち方としては、保護者同士の話し合いの時間を設定することで、不安や悩みを軽減したり、話すことへの抵抗感を低めたりしていく等の工夫を考えている。このように、保健室での個別対応から見えてきたことを、保護者集団への働きかけにどのように生かしていくかという工夫が養護教諭に求められていると考える。今後も、保護者のニーズを踏まえ、保護者との協働を目指した実践的で効果的な保護者支援の方法を模索していきたい。

5. 文献

田代美江子・渡辺大輔（2019）今こそ性の学びの協働を！特集にあたって．セクシュアリティ No.91 エイデル研究所．

広瀬裕子（2019）学校の性教育と親（保護者）の関係について改めて考える．セクシュアリティ No.92 エイデル研究所．

1)「パスポート」について

「パスポート」の内容は、固定するのではなく指導の中で生徒から出てきた質問や、関わった事例から見てきた学習課題等から随時追加したり修正を加えたりしている。「パスポート」は決して完成したものではなく、今後も実践を通じて検討を重ね、実態に応じて内容を改訂していくことを前提としたものである。

パスポートの概要 一回の指導時間 20分～40分

タイトル		
境界線のルール	妊娠のサイン	性感染症
知っておきたい生理のこと	避妊	恋を語ろう
あなたの脳と心・体	こんな時どうする？情報源	*今日はちょっと聞いてほしい
男性の性器	性の被害・加害	*こんなこと知りたい
人工妊娠中絶	いろいろな性、いろいろな家族	